

第九章

響子夫人に、小野が冬子嬢に對する求婚の心を、打明けた翌日は、更に輝かしい春の初めの晴れた日曜日だつた。

小野は昨夜興奮で、よく寝つかれなかつたために、其朝は殊に毎もより少し遅く、隣見家の書齋で眼を覺した。そしてそれを悔いるやうに、慌て、床から飛び起きた。樺色の窓帷を開けて見ると故先の所謂『硝子戸の中』まで、午前八時過ぎだが、うつりと流れ入つた。彼はすぐ昨夜のことを考へて、そして妙に暖い幸福感と、頬の底に血が集まつてくるやうな羞恥と、それから胸がときめく不安な念を覺えない譯には行かなかつた。

彼は毎ものやうにその儘起きて、すぐ夫人や令嬢たちに顔を合せることが、非常に恥しく怖かつた。殊に夫人に對しては、此方の心をすっかり打明けて終つた後の、親しみを感ずれば感ずるだけ、何となく面映ゆい心持がした。が、起きた以上、どうせ顔を合せなければならぬのは決つてゐた。そしてもう十分朝寝をし過ぎた以上、恥しいからと云つて、その上いつまで床の中にあることは、猶更できないことであつた。——小野は思ひ切つて床を蹴立てるやうに放れた。そして手早く衣服を着換へると、家族の人たちのゐる茶の間の方へ出て行つた。

茶の間には、切爐の傍に、果して夫人と令兄の長三氏とが、新聞などを讀んでゐた。當の冬子嬢た

ちのゐないのが、せめてもの心安さだつた。

小野はそこへ行つて、さりげなく無雜作に近寄り、鳥渡手を突くやうにしながら、まづ簡單に、「お早うございます。」

と、挨拶するぎりなかつた。何だか鳥渡夫人の顔を、眞面に見られないやうな氣持だつた。

「お早う。」夫人もすぐにさう應じてくれたが、夫人の方では別に昨夜のことに、關心つてゐる模様もなく、遠慮なしに此方を見上げて、微笑と共に云ひ足した。「相變らず遅いのね。——子供たちなんぞはもうみんな、出かけて行つて終ひましたよ。新太郎と淳二は、もう代々木へ馬乗りに行きましたし、娘たちもみんな矢來へ遊びに行きましたよ。」

「もうそんなに遅いのですか。」

小野は少し顔を赧くし、頭を掻くやうにして云つた。何だか今朝の遅起きは、昨夜のやうな話のあつた後で、一生の不覺のやうに悔いられた。夫人からさう云はれると、娘の婿たる資格のない「だらしなさ」を暗に責められてるやうな氣さへした。が、寝つかれなくて、そのため明方になつて寢たため、つい起き忘れたなぞと、辯解めいたことを云ふのは、猶更昨夜の話の後で、わざとらしくてできないことであつた。

「もう十時よ。でも、貴方がたとしては早い方でせうね。」

夫人はなほも窘めるやうに、併しながら親愛の微笑を以て、さう言つた。それは口では責めてゐるが、心では許してゐるのだし、親しいからそんな風に云ふのだといふことを、露に示した態度だつた。

「どうも濟みません。」

小野は頭を掻いて、そんな風に單純に、笑ひながら謝まることに依つて、それに酬いる外なかつた。

またさういふ愛嬌のある、子供らしい簡単な陳謝は、小野が持ち前の防禦法であつた。

「いゝお天氣ですね。もうすつかり春になつて。」  
その場を取扱すやうに、長三氏が傍から云つた。長三氏の白いちよほ／＼の上着が、いかにも好人物ぶつの老人であるやうに、その明るい障子の反映で、鮮かに光つた。戸外は庭の檜葉や植込に、ゆらゆらと著しく紅みを帯びて来た日が、煙るやうに照つてゐた。

「ほんとうにいゝ天氣ですね。」  
小野も心からさう答へた。何だか恥しいながらに、夫人に打明けて了つた後の心は、何となく祝福されたやうな、幸福感に満たされてゐることも拒み得なかつた。

「これからは貴方がたの時候ですね。今日はどこかへお出かけになりますか。」

「いえ、先生の本の校正が、少し溜つてゐますから、お留守居がてら今日は此方で、それを片付けようと思つてゐます。丁度お嬢さん方がゐないなら、あの離室の方で……」

その頃小野は、先生の『鳥籠』の縮刷本が出るので、その校正を進んで引受けてゐた。それでそれが理由として、もつと勝見家にゐたいと思つたのだつた。いつも、翌日の夕方から夜までゐて、歸るのが常ではあつたが、今日は何だかそんな理由にならぬ小さな理由でも、すつとゐる申譯にしたい氣持だつた。

そこへ女中が顔を洗ふ湯を取つてくれた由を通じて来たので、小野は顔を洗ひ、さうして飯を食つた。その間夫人は、なにも昨夜の話には觸れなかつたが、そして殆ど忘れたやうに、その問題に關心つてゐる様子もなかつたが、小野は夫人の前にゐることが、何となく氣づまりでならなかつた。その

肥つた身體に、縋りついて揺ぶつて見たいほど、親愛さを増してゐるにも係はらず、矢つ張り何となく生恥しくてならなかつた。で、機會を見て彼は、校正刷を見るために、一人で離室の方へ行つた。

その一間は、前にも云つた通り、機會を見て彼は、校正刷を見るために、一人で離室の方へ行つた。その機が二つほど雑雑作に並べられてあつて、床の間には小さい書架と、切り硝子の一輪挿しなどが、簡単に飾られてゐるだけだつたが、小野に取つてはどこよりも安易な、慕しい部屋に違ひなかつた。

彼は今までもよく宿直の度に、令嬢たちが學校へ行つた留守に、こゝへ入り込んで、校正をしたり本を讀んだりした。そして机の上に置き捨てられた、誰のとも知れないが、硝子の球の中に萬華鏡の如く、色々な結晶形の花模様を沈澱させた文鎮を珍らしげに眺め入つたりした。

黒い塀に區劃られた、僅かばかりの前庭にも、彼女たちの植ゑた草花の芽が、花壇の土から青く日に透いてゐた。

そこで彼は自分の手を置いた後が曇るやうな、一閑張りの机に身を凭せかけたまゝ、熱心に校正をすると共に、うつとりと空想に耽ることが多かつた。

殊に今日は、胸の底がときめくやうに覺えて、赤インキに浸した筆を忘れることが多かつた。うつとりした空想と、夢のやうな幸福感に全身を任してゐる方が多かつた。女中が、毎ものやうに紅茶やカステラの類を、母屋から運んで来てくれた。彼はその紅茶の、冷たくなつた残りをも、沁々と嬉しい思ひに包まれて啜つた。

お午少し前のことだつた。

小野がさうしてゐると、離室の入り口の方で、ことりといふ音がして、人が入つてくる氣配がした。小野は空想から覺めて、多分女中か誰か、茶器でも下げに來たのだらうと、氣にも止めず振り返つ

て見た。と思ひがけなくもそこには、冬子嬢がいつの間にか歸つたと見えて、平常着のまゝの姿を現はした。

「あら。此方にゐらしたのね。」

かう云つて、彼女は座敷の隅のところ、鳥渡立ち停るやうにしたが、小野を見て、別に吃驚したのではなかつた。彼女は小野が此方にゐることを、前から知つてゐるに違ひなかつた。

「あ、もうお歸りになつたんですか。」

小野は胸をどきつかせて、鳥渡のすまひを正しながら、さう云つて迎へた。

「え、私お母さまの御用で、鳥渡淺嘉町へ行つたのよ。だから、すぐ歸つて來たの。——もうお仕事できて？」

かう云つて、彼女は殆ど躊躇なく、小野の机の横に、火鉢一つ隔てゝ座を占めた。外出から歸つたばかりと見えて、毎もより綺麗にお化粧をしてゐたが、歩いて來た餘温のために、いつもはさう冴えない顔色も、ぼつと生々した血の色を底に帯びて、額のあたりは仄かに汗ばんでゐるらしかつた。

「いえ。まだ三臺分位しかやつてゐません。随分寝坊しまつて、一時間ばかり前から始めたばかりなんですもの。」

「さう？　ぢやあまだ澤山あるの。」

冬子嬢は小野の机の端に、置かれた紙の重なりを窺ふやうにした。

「さうですね、この頃怠けちやつて、彼此十臺ばかり溜めたもんですから。……」

「ぢやあ、私が來ちやあお邪魔だわね。」

冬子嬢はかう云つて、小野の眼を見返した。

「いえ。」小野は少し慌て、打消さざるを得なかつた。彼に取つては、今日こゝで冬子嬢と、二人つきりで話し得ることは、——前からこんな機會は頻繁にはあつたが、今日は特に願つてもない好機だつた。

「そんなことはありません。僕ももういゝ加減飽きてゐるところです。さう一氣には、迎もできませんからね。どうかももう少しゐて、話して行つて下さい。丁度いゝんですから。……」

「さう？　ぢやあ遊んで行くわ。」

さればといつて、二人の間にはすぐ取り上げるべき話題もなかつた。が、小野に取つては、冬子嬢に何か云ひたいやうな、打明けたいやうな心持で「ばいだつた。彼は庭の方を向いて、いろ／＼と話の糸口を引き出さうと考へた。が、どんなことを云つていゝか、解らなかつた。天氣のことなどを、云ひ出すのも、餘りといへば月並だつた。

「お母さまは向うで、どうしてゐらつしやいます。」

まづそんなことを小野は云つてみた。

「何かお裁縫みたいなものを、擴げてゐらしたやうよ、珍らしく。……」

彼女も、見るともなく庭の方を眺め、その罫紙を通して、前の横町を通る午の豆腐屋の喇叭に聞き入るともなく聞入つてゐる様子だつたが、此方を向いて微笑した。

「さうですか。」彼はそこから二の句が續げなかつた。「それは珍らしいですね。」

「二人はまた暫く黙つてゐた。」

「定子さんたちはなかく歸つて來ませぬね。」

小野はまたそんな問を發して見る外なかつた。

「ええ。きつとお晝には、歸つて來ないのよ。チイチヤんたちと一緒に、文明館の活動でも見てるんだわ。きつと。」

「どうして貴女は一緒に行かなかつたんです。」

「私？ だつて、つまらないんですもの。私、活動を見てみると、面白いけれど、頭腦が痛くなつて來るのよ。だから、さう行かないの。それよか、私之居が一度見たいわ。卒業したら、お母様が連れてつてくださるつて云ふけれど、まだ、私たちバンドマンのオペラつきり、外のものはお父様がいけないつて、見せてくださらなかつたのよ。」

「芝居なんて、そんなに面白いもんぢやありませんよ。けれども、少しは見て知つて置くのも、悪くはないでせう。學校を卒業なすつたらどこかへ僕が御案内してもいいです。」

小野は彼の文學上の専門が、幾らか演劇に互つてゐただけに、却つて謙遜しながら、勿體らしくそんな風に答へてゐた。そして、その後、

「もうすぐ卒業ですね。」

と、咏嘆するやうに附け加へるのを忘れなかつた。

「ええ。やつと卒業だけはしさうですわ。けれども其後、私、困つてゐるのよ。」

「どうしてです。」

「私、音楽學校の入學試験を受けるなんて、何だか厭なのよ。入れさうもありませんし、入つたつてうまく行きさうもないんですもの。黒田さんの奥さんに伺つたんですけれど、今年は音楽學校の先生のお嬢さんで、大變ピアノがお上手な方も入學するんですつて。さういふお上手な方と、同級に入る

ことになる、たとひ競争するなんて積りはなくても、何かにつけていろんな辛いことがあるんですつて、あの大人しい奥さんまで、さう言つてゐらしたわ。だから私、なほ厭になつたのよ。」

「そんな事はありませんよ。そんな風に、詰らない考へを起さないで、まアやれる所迄やつて見るんですね。」

小野はそんな風に、まづ勧める外仕方がなかつた。

「私、何だか音楽學校へなんぞ入るより、家にゐて何かお稽古でもしてゐた方が、よつほどいいやうな氣がするのよ。」

「それはさうかも知れませんがね。」何かにつけて、小野は人の云ふことに、さう強く反對などはできない性分だつた。殊に自分の戀する人の云ひ分などには。——で、彼はその意を迎へるやうに云ふのだつた。

「お母さまなども、貴女が音楽學校へ入らなかつたら、家にゐて家事の手傳ひでもして貰ふといふやうなお話でしたよ。……」

かう云ひながら彼は、本人の冬子嬢に向つては、内密にそんなことを決して云ふまいと思つてゐたに係はらず、何だか自分の求婚の心を云ひたくて堪らない衝動に囚はれて來た。夫人にあつて了つた以上、五十歩百歩だといふ氣もした。が、夫人にも本人にも直接、そんなことを云はないと宣言めいたことを云つたのだから、今更こゝで冬子嬢にそんなことを打明けては、夫人に嘘を吐いて先廻りをする事になる、と、躊躇されなかりなかつた。

「私もその方がいゝわ。貴方はどうお思ひになつて。」

「さあ。——僕は音楽學校へお入りになつて、藝術を以てお立ちになるのも、前から言つてゐるやう

に賛成ですが、また、貴女がごく普通の家庭の婦人として、一生を過すのも却つて幸福かとも思ひますよ。」

彼のその言葉の中には、明かに底意が含まれてゐた。彼は彼女の爲よりも殆ど自分の爲に、後の事を賛成してゐるのだつた。

「さうですわねえ。」

冬子嬢は考へ込むやうな様子を示してゐた。

そこまで来ると、小野はもう昨夜のことを、彼女に打明けたい衝動に、勝つことはできなかつた。この機会に、これまで話が進んだ時、あの事を云ひ出さなければ、もう云ひ出す機会もないやうに思はれた。彼は半ば自分の動悸に、酔つたやうな心持で云ひ出した。

「冬子さん。」かう呼びかけて彼は唾を鳥渡飲み込んだ。「貴女まだ奥さんから、何もお聞きになりはしませんか。」

「え、まだ何にも。」

冬子嬢は小野の語調が、少し變つたのに驚いたが、鳥渡顔を上げて此方を見返した。

その視線を避けるやうにして、小野は熱して云ひ續けた。

「僕、昨夜奥さんに、貴女のことについてお願ひしたんですがね。」

「さう？」彼女はまだ事情はよく了解しないながらに、重大な問題らしい豫感を感じたと見えて、息を引緊めるやうに、頰を襟の中へ引くやうにして、鳥渡上眼使ひに、反問の視線をちらと小野に投げた。そして二人ともその視線を外らした。

小野は下を向いて云ひ續けた。

「實は僕のやうな者でも頂けるんだつたら、貴女を細君に頂きたいつて、さう申上げたんです。僕は長い間、さう思つてゐたので、昨夜たうとう思ひ切つて、奥さんにお願ひ申上げたんです。……もしたら奥さんも、貴女さへ異存がなければ、まあ自分としては賛成だつて、幾らか承知してくださいました。……だから、いづれ奥さんから、貴女にそのお話があるだらうと思ひます。……」

ちらと窺ひ見ると、冬子嬢の横顔は、所々斑な緋紅色に染つて、俯向けられてゐた。彼女の方には何の答もなかつた。

「こんなことを云ふのは、甚だ厚顔だとは思ひますが、僕にどうか聞かしてください。」小野はそれに係はりなく續けた。「もし、奥さんがさう仰しやつたら貴女はどう答へてくださいます。……」

小野は思ひ知つて、顔を上げて彼女の横顔をぢつと窺つた。が、彼女は胸の動悸と、喘む呼吸をぢつと抑へるやうに、更に首を垂れたまゝ、何とも云はなかつた。彼女の眼は、黒塗りの一閑張の机の一點を見開いたまゝ見凝めてゐた。

「……お厭ですか。」

小野はもう一步進んで、更にぢつと覗き込んだ。

が、彼女は抑制の努力のためか、前髪を少し顫はせながら、口では勿論、様子でも示さなかつた。たゞ黙つて、仄かに血を漲らせた片頬を、寧ろ頑固さうに動かさなかつた。が、その様子のどこにも「厭」だといふ意志を表示する、潜在的な態度も見えなかつた。

「……では、お厭ではないんですね。」

小野は更にさう突つ込んで訊ねた。

彼女は俯垂れてゐた首を、更に低く俯向けたが、それを肯定と取るべくは、餘りに微な表現だつた。

そして前よりも少し首を垂れたまゝ、彼女は更に頑強に動かなかった。たゞいづれにもせよ感情が迫つたためか、涙が湧き出て來たらしく、頻りに目をしばたゝいてゐた。

かうして、暫くの間、二人は黙つてゐた。

たうとうやがて、小野の方が又取做すやうに云ひ出した。

「僕ももう長い間、そのことに就いて考へぬいて、たうとうかう云ひ出したんですから、貴女がもしお厭でなかつたら、私の願ひを聞いて下されば、どんなに幸福か解らないと思つてゐます。しかし、こゝでこんなことを云つたつて、貴女に取つても一生の問題なんですし、また私の方だけがかう一生懸命思つてゐても、貴女の方にお考へもあるでせうから、もしお母様がお聞きになつたらそれまでに強請するんぢやないんですし、又そのため私がどうかうといふやうな御心配はして下さらなくてもいいんですから、どうぞよくお考へになつた上、御返事をなさるやうにして下さい。たゞ僕としては飽へないなら、御承諾下さつたら、非常に幸福だと思ひます。……」

この時やうやく冬子嬢は、かすかながら肯いた。

「それからまた、今申上げたことは、お母さまにはどうぞ仰しやらないで、貴女一人の胸に收めておいて下さい。僕は貴女に直接、こんなことを申上げる積りぢやなかつたんですが、この場の都合で、つい云はずにをられなかつたんですから。……」

今度は彼女は更にはつきりした態度で肯いた。小野は兎も角も、冬子嬢の態度が、全然否定的に傾いてゐないのを、辛うじてそれらに依つて、確め得たやうに思ふ外なかつた。そしてその點頭を見る

と、小野は安心と共に、改めてかう云つた。

「……ほんとに失禮しました。」

「……え。」

彼女はやつと聞える位の聲で、また此方は向き得ずに、さう云つた。それも小野には一縷の望みだつた。

かうして二人はまた、暫く言葉なしで、また俯垂れてゐた。小野は校正用の朱筆を、無意味に指頭で弄んでゐた。

と、暫くして突然、冬子嬢が云ひ出した。

「あの、私。……御免なさい。」

かう云ふと共に、つと彼女は立上つて、そして逃げるやうに部屋を出て行つた。が、その態度には、毫も嫌悪から來たらしい様子は見えなかつた。

小野はその後を見送つたまゝ、ちつと暫く物思ひに沈んでゐたが、微笑が自ら彼の頬に上つて來るのを、禁ずることができなかつた。

……その晝、飯に呼ばれて母屋へ行つた時、小野は冬子嬢と一緒に食卓へ就かねばならなかつた。冬子嬢は少しも小野の方を見なかつた。そして小野は殆ど食ひ始めるか始めない位に、食事を済ませるやうにして車を立上げた。彼女は殆ど一杯も飯を食はない様子だつた。

小野は微かな苦笑を以て、それをひそかに見送つた。

見もあれ、冬子嬢が自分に對して、さう悪態を抱いてゐないだけは、小野も臆けながら解つた。併しそれは殆ど今までの豫期以内、何ら加ふる所がないことだつた。

この上はたゞ母夫人からの正式の答を、小野は只管吉いやうに祈る外なかつた。

二

小野は馨子夫人からの答を、待ち焦れてゐた。が、それから四五日経つても、夫人から返事はなかつた。勿論その間にも、一二度顔を合せたが、そのことに就いては、夫人の方から一言も話はなかつた。けれども小野の方から、さう性急に催促することもできなかった。彼としては、馨子夫人がすぐにも、冬子嬢の意志を訊ねてくれて、いづれとも一兩日のうちには、何とか返事があるやうに、一人で期待してゐたのであるが、それはもとより無理な話だつた。夫人の方では冬子嬢に云ひだすにしていなかつた。又冬子嬢とても、輕卒に決すべき問題でないのは知れきつてゐた。

たゞ併し、さうは思つても、小野にとつてその期間が、長かつ不安な思ひに満たされぬ譯に行かなかつた。彼は焦慮してゐた。が、悲觀はしなかつた。夫人が自分の味方である以上、悪く行つても五分位の望みは囑してゐて差支ないといふ、一種の自信を持つてゐたからだつた。そして七八分までは冬子嬢が、承諾するに違ひないといふ、自惚さへ持つてゐたからだつた。

併し、それから一週間ばかり経つた或日のことだつた。馨子夫人から突然、小野の下宿へ電話がかつて來た。

勝見家からの電話だといふので、飛び立つて出てみると、向うの電話口へは夫人がもう直接に出てゐた。

「あゝもし、小野さんですか。私、馨子ですよ。」

夫人の低いが、はつきりした響のある中音を聞くと、小野はすぐ用件を理解して、胸の動悸を高めた。

「あのね。」向うの電話は響いた。「今日はから少し話があつて、貴方の所へ行かうと思ふんですけどね。今、誰か來てゐますか。」

「いえ、誰も居りません。」

小野は畏まつて答へた。

「誰も來ないでせうね。誰か來てゐる所へ、私が貴方を訊ねて行つたりすると、何とか不思議に思はれでもすると困りますからね。誰も來ないでせうね。」

「え、参りません。ひよつとしたら杉浦が來る位なものです。今夜、實は赤坂のロイヤル館で、東小路氏の『盲ひし兄』といふ芝居がありますんで、それを二人で見に行く約束がしてあるもんですからね。併し、それ迄には随分間がありますから、今いらしつて下されば、誰も參らないと思ひます。來ても斷つて了ひますから……」

「さうですか。杉浦さんなら、いらしつたつてもかまひませんよ。どうせあの人へは貴方からお話するでせうし、氣心も知れてゐますからね。——で、その芝居は何時からなの。」

「確か六時からだと思ひました。」

「さう？　ちやまだ十分間がありますわね。ちやあ私も是から貴方の所へ行つてお話を済ませたら。そちらへ一緒に行くつてもようござんすから、兎に角待つてゐて下さい。すぐ行きますからね。」

「さうですか。では是非……お待ちしてをります。」  
かう云つて電話を切つたが、小野の心は期待で戦くやうだつた。吉左右か、否か。——夫人の用向

きといふのは、必ずあの話には違ひないが、その吉凶の判断は、電話のときの聲だけで、到底判ずることができなかつた。併し、わざ／＼向うから電話をかけて、此方へ向うて来て話すといふ以上、其處に何か有望なものが豫想された。もし全く駄目ならば、強ひて機會を向うから求めて、話に来るなど、いふことはあるまいと思はれた。が、あの氣丈な夫人のことだから、いづれにもせよことが定つたら、一刻も早くはつきりさせて了ふために、平氣で拒絶に来るかもしれない……。さうは強ひて氣遣ひながら、小野はやつぱり有望な方へ、考へが傾くのをどうともすることはできなかつた。

夫人の來るのを待つ間は可なり長かつた。かういふ前觸までして置いて、萬一夫人が出さきに用でも起り、そのために延びでもしたら、小野は氣死して了ふかもしれないと思ふ位だつた。が、電話から約二時間ほどして、夫人の來訪は下宿の女中に依つて取次がれた。

小野は慌て、自ら出迎へた。この汚い下宿の玄關に、夫人の來訪を受けることを、何となく貴女の來臨を仰ぐやうな光榮を感じながら、

「お待ちしてをりました。さあ、どうぞ此方へ。」

夫人は無言で鷹揚に會釋して、亂雑に並んだ書生下駄の間へ、疊付きの洗い女下駄を氣味悪さうに脱ぎすてた。かういふ外處へ出たときの例で、夫人は不機嫌な怒つてゐるやうな顔をしてゐたが、小野はさう思ひながらも、今日はその顔色をも氣にしなければならなかつた。

併し、與まつた小野の一室で、對坐したときの夫人は、決して不機嫌なのではなかつた。

夫人はそんなことを云ひながら、部屋四圍を見廻した。部屋は夫人が來るといふので、さすがに無精の小野も、少し取片付けて置いた。が、道具といつては、殆ど何もない部屋の中は、陰氣で淋し

かつた。

「え、是でも此處らの下宿としては、いゝ方の部屋なんです。」

「此處は前に大寺さんもゐた家ね。私も二度來たことがありましたよ。大寺さんのゐた部屋は、何でも表の方に在つたやうでしたが、なかくいゝ部屋でしたよ。」

「あゝ、さうでせう。表二階の方に、もつといゝ間は在るさうですから。……」

二人はそんなことを、まづ四五言話し合つた。と、その言葉が鳥渡切れたとき、思ひがけなくも急に、夫人の方から云ひ出した。

「ときにあのお話ね。」端坐したまゝの夫人は、小野を眞直に見据ゑながら、直入に云ひ出したのだつた。

「貴方が望んでゐらつしやるやうないゝ御返事はできないかもしれせんよ。」

「さうですか。」

夫人の意外の言葉に、まだ事情は解らぬながら、まづ元氣を挫かれて了つた小野は、鳥渡夫人の顔を見返して、そつと引緊めてゐた息を洩らした。が、落膽する程の餘裕もなかつた。

「でも氣をお落としになるには及びませんよ。別に駄目だといふんぢやないんですから。」夫人は一轉して、慰めるやうに更にかう前提した。

「はア。」小野は全然宣告を受ける人のやうに、下を向いて夫人の次の言葉を待つた。

「實はあの次の日にも、冬子に貴方のことを訊いてみたんですよ。するとあの子の方でも、今まで何の氣もなしに、親しくお交際はしてゐたけれど、結婚といふやうな問題は、まるで考へたことが無かつたから少し考へさせてくれつて云ふのよ。尤もだと思つたから、私も返事の猶豫を與へてやつたん



です。するとね。昨日まで何とも返事がないんでせう。餘り長びくと、貴方の方でも待つてゐらつしやるからと思つて、私、昨日又催促的に訊いてみたよ。」

「はア。」小野は、『そしたら、何と仰しやいました。』と口では云へずにとかう受けるばかりだつた。「すると冬子の言ふにはね。彼女も決して貴方を嫌ひぢやないし、寧ろいゝ人だとは思つてゐるけれど、何だかまだ、是非結婚しなければならぬと思ふ程は、貴方に、……何て云ふんでせう、つまり……深い愛を感じないといふんだわね。つまり又違ふ目で以て、貴方を見なければならぬし、色々もつと考へなればならぬ問題もあるから、是からはさういふ積りで以て、貴方とお交際してみ、愈々結婚してもいゝと思つたら、そのとき改めて御返事することにしたいつて云ふよ。——これは勿論、冬子の言葉其儘でもありませんし、又私の考へも交つてゐますけれど、大體まあ彼女の意圖もそんな風なのよ。だから貴方も、これからそんな風に試験されるのは厭でせうけれど、もう少し時期の來るのを待つて下さい。私も冬子に貴方のことはよく言つてやりましたし、又是からもよく勧める積りでせう、そのうちにはきつと貴方のお望み通りになりますよ。もとゝ貴方を、決して嫌ひではないといふんですからね。たゞ二つ返事で承知するほどでなかつたといふんですからね。」

夫人は幾らか慰撫するやうに、又愛護に満ちた口調で云つてくれた。

「さうですか。いや、色々と御心配をかけて、ほんとに有難うございました。それだけでも、僕としては嬉しい御返事です。私は今すぐに、承諾して頂かうなどは、餘り蟲がよ過ぎる希望だと思つてゐました。——が、併し、それなら冬子さんは、外に結婚などいふ問題は、誰とも考へてゐなかつたんでせうか。それとも誰か他の人と、さういふやうなことを考へてゐたんぢやないでせうか。」

小野はやつと元氣を回復して、そんなことを訊き返す氣になつた。

「それは、そんなことはないやうですよ。私もその點は、よく訊ひ糺してみましたが、あれば杉浦さんに對しては、すけれどね。杉浦さんに對しても、貴方に對する以上の氣持は、別に持つてゐないさうですよ。で、結婚といふ所まで考へはしないにしても、貴方にはまあ一番好意は持つてゐたらしんです。ですからその點はまあ御安心なさい。」

「さうですか。それならまあ幸福ですけれど。……」

「ですから、貴方も兎に角自重して、餘計なことをしないで待つておいでなさい。冬子が、それでもまだ結婚する氣になれなかつたら、そのときは仕方がありませんが、まだ決して、貴方に悪い方へは向いてゐないんですからね。まあ焦らないで、時期のくるのを待つておいでなさい。」

「そんなら今まで通りに、冬子さんとも親しくお交際して、別に差支はないんですか。奥さんも冬子さんもそれを許して下さるんですか。」

小野は少しく希望に輝きながら云つた。

「え、ようござんすとも。間違つたことさへして下さらなければね。それを寧ろ望んでゐるんですよ。だから遠慮しないで、今まで通り遊びにいらつしやい。」

「有難うございます。何だかきまりが悪いけれど。……」

「さう云へば今夜は、貴方の泊り番でせう。そんなこと平氣でいらつしやいな。悪びれたりすると、却つて冬子の方だつて氣持が悪うござんすからね。」

「え、今夜は晩く、ローヤル館の芝居が濟んでから、參る積りででしたが。……」

「あゝさう。その芝居へは私も御一緒に行くんでしたわね。丁度暇ですから、連れて行つて下さ

いな。誰でも入れるんでせう。」

夫人は先刻電話でもさう云つたが、又改めてそんなことを云つた。夫人は一つには、良人を失つた後の寂寥を、何かにつけて慰めようとしてゐるのだつたが、又若い書生を伴に連れて、さういふ場所へ行くことも、もと／＼嫌ひではないらしかつた。そして今日は殊に小野と行動を共にして慰愛の念を示してくれる心になつてゐたらしく、進んで同行を求めたものに違ひなかつた。

「え、入れますとも、僕たちの森本といふ友人が、今度其處でやる芝居の監督をしてゐますんでね。一つは義理で見るとすけれど、出し物も鳥渡ようござんすからね。奥さんがおいでになるなら、喜んでお伴致しませう。そのうちには杉浦も来る約束になつてゐますから、來たら御一緒に出かけませう。」

「杉浦さんには、いづれ貴方からお話ししなくちやならないでせうが、今の話はなるべく秘密にした方がようござんすよ。」

「え、畏まりました。僕は勿論ほんとの親友以外には、誰にも云ひません。」

「……東小路さんの芝居つて面白いの。」

夫人はそんなことから、やうやく話頭を用件から轉じた。

かうしてその後は、普通の雑談を三つ四つ交してゐるところへ、待つてゐた杉浦がやつて來た。杉浦は例に依つて、女中の案内も待たずに、廊下の所までどん／＼上つて來たらしかつたが、誰か

客の居ることを、室外から察したとみえて、それでも、

「おい、小野、入つてもいいか。」

と聲をかけた。小野は夫人と顔を見合せて、鳥渡微笑を交したが、

「あゝ杉浦か。入れよ。待つてゐたところだ。」

と、云つて迎へるべく立ち上つた。

「誰かお客さまぢないか。」

杉浦はかう言ひながら、障子を開けた。その小野の部屋には、三疊の次の間がついてゐて、其處から部屋の内にゐる夫人の姿は、まだ杉浦には見えなかつた。

「うむ。君も知つてゐる女の人だ。」

小野は微笑しながら云つた。

杉浦は少し逡巡氣味に奥の部屋をそつと窺つたが、夫人の姿を發見すると、意外さうにはつと目を睜つた、が、すぐに彼は常態に返つた。

「やあ、奥さんですか。僕は又入つて來たとき、ちらつと女の束髪が見えたんで、小野の奴飛んだ年増の情婦か何かを、何處からか引入れたなと思つて、ひそかに驚嘆しながら入つて來たんですがね——奥さんでしたか。」

彼は平常何方かといへば、無口のむつ／＼り屋らしく見える癖に、折に觸れるとかういふ冗談を平気でつけ／＼云ふのだつた。併し、さういふ冗談を言ひながら、彼は夫人の來てゐる其場の様子を、もう幾らか察したらしかつた。そしてこの冗談は、その察知し得たことに對する感情を、幾らか蔽ひ隠さうとする努力の結果らしかつた。

「私でお氣の毒さまね。」

夫人もそんな風に應じてゐた。

小野は其場の事情を、辯解するやうにまづ言つた。

「君の來るのを待つてゐたんだよ。奥さんも御一緒に、芝居へ行きたいと仰しやるんでね。」  
 「是から貴方がたと一緒に、何處かで御飯を食べて、それから芝居へ行かうと思ふのよ。貴方も無論つき合つて下さるでせう。」  
 夫人もかう云つた。

「え、それは勿論お件致しますけれど。……」杉浦は何となく浮かぬ顔をしてゐた。が、更に冗談らしく甘えて云つた。「そんなら少しうまいものを奢つて頂かなくつちや厭だな。」  
 「え、奢つて上げますよ。——ちやあもうすぐ出ませうか。何處へ行きませう。」  
 「交通の便宜上『風月』がよはありませんか。」

そんなことで、兎に角三人は、連れ立つて表へ出た。夫人を中央にして、大學の制服を着た杉浦と焦茶の洋服を着た小野とが、左右に從つて歩いて行つた。

……『風月』で定食を食つて、それから赤坂のロイヤル館まで行つたときは、もう開演に間近い頃だつた。

その頃ロイヤル館は、ロシーといふ帝劇の舞踏教師が、歌劇を経営してゐる小劇場だつたが、其處を借りて新劇團體のうちでも、有力な舞臺協會の連中が、今度復活的な旗上げをしたのだつた。その舞臺監督には、小野の友人の森本が當つてゐた。森本と小野とは、殆ど高等學校のときから、一緒に演劇に志して、勉強し合つた仲間だつたが、中途である鳥渡した行き違ひから、暫く友情が疎隔してゐたが、今度彼が舞臺協會を引受けて、開演することになると、やつぱり何を措いても同情的に見物しなければならぬ義理があつた。

小野はその劇場の前に立つたとき、自分の戀にすつかり囚へられて久しくさういふ新劇運動などの

空気に觸れなかつたのを感じた。が、併し、淋しいとは思はなかつた。かうして前の彼の友人たちが、頻に藝術上の立ち場を得ようと努力してゐるのを見ると、彼もさうした方面に於ける焦慮を幾らか感じないではなかつたが、併し自分に取つては、何より大事な戀だつた。……

彼は勝見夫人をつれてゐることに、誇りを感じて得意さうに案内した。そして下の一等席の、中頃の椅子に三人並んで席を取つた。

劇場の中には、文學者や演劇愛好家や、いつもの新劇の廊下を賑はす人々が、澤山來てゐた。作者東小路氏の關係で、その人たちのやつてゐる雑誌の連中も、可なり顔を見せてゐた。さうした中に在つて、小野は、もとより眇たる存在であつたけれど、彼は勝見先生の夫人を連れて居るといふことに依つて、何となく得意に感ぜざるを得なかつた。

大寺氏や林田氏や矢部氏などの、先輩弟子たちの多くも、殆ど全部招待を受けて、向うのボックスの方に來てゐた。さういふ人たちも、夫人が來てゐるのを見つけると、遠くからお辭儀をしたり、寄つて來て挨拶したりした。

なかにも大寺氏などは、すぐ例の前屈みな足どりで、慇懃さうに近づいて來て、そして親しく挨拶するのだつた。

「……奥さん、丁度いい所へおいでになりましたね。此次の幕間には御飯を奢つて頂きますよ。」  
 氏は心安立にそんなことを云つた。

「駄目よ、もう、私は此人たちと一緒に、今『風月』へ寄つて來たばかりなんですもの。」  
 夫人は笑ひながら小野たちを顧みて云ひ返した。

「さうですか。そいつは怪しからんですな。」

大寺氏は冗談らしくさう云つたが、横目でぢろりと不快げに小野の方を見た。小野は何か取做し顔に云はずにはゐられなかつた。

「此處にも食堂が何かやつたんですか。そんなら此處で食つてもよかつたんですが……」併しそれには大寺氏は、わざとのやうに一顧をも與へなかつた。

「ぢやあせめて此次の幕間には、僕たちと一緒に茶でも飲んで下さい。皆、来てゐますから。」大寺氏はさう云つて、自分の席の方へ去つた。小野は大寺氏が何となく自分の、夫人を伴うて來たことに對して、反感を持つてゐるらしいのを、感ぜざるを得なかつた。が、併しそんなことは、一種の軽い嫉妬で、一時的のものだとしか思はなかつた。

そのうちに幕は開いた。芝居は戦争で失明した盲畫家が、今度は窮乏のうちから作家として立たうといふのを、その妹が健氣に助けるといふ筋のものでつた。そしてそれは東小路氏の作中でも、代表的な感動に満ちたものでつただけに、序幕からしてやつぱり観客の心を捕ふるものがあつた。俳優も相應に巧だつた。殊にその妹に扮した女優の、初ぶな眞率な演技は、觀劇擦れのした小野の心を、幾度か涙ぐましめた。——小野の心は興奮と共に、非常に感じ易くなつてゐたのだつた。

次の幕間には約に従つて、先輩の弟子たちと一緒に、夫人や小野たちは茶を飲んだ。が、小野は夫人を連れて來た得意さに引代へて、先輩たちが何となく自分に、反感を持つてゐるやうな氣配の見えるのを更に漠然と感じない譯には行かなかつた。それで彼はできるだけ控へ目にしてゐた。杉浦はさういふ多勢の中へ入つたときの當で、なぜか黙つてゐるきりだつた。黒田だけが例に依つて元氣よく、小野を相手にして喋つてゐた。が、黒田の辯舌は、自分一人で熱して相手にはさうかまはない質のものでつた。——小野はその間に在つて、何となく孤立の、捉へ處のない淋しさに陥つてゐた。そし

てそれにつけても自分を認めてゐてくれるのは夫人だけだ、といふやうな感謝の氣持に捉はれるのだつた。

やがて又幕が開いたので、皆は席へ歸つた。そして小野は又夫人と杉浦と相並んで、その一幕を見物し終つた。が、幕間になつても、夫人は便所か何かへ立つたが、小野は席を立たなかつた。すると杉浦もやつぱり立たなかつた。彼もやつぱり立つて行つて、先輩たちと話をしたつて相手にされな

と思つてゐるしなかつた。

小野は今更ながら、杉浦だけが自分の心を打明けて、話相手になつてくれる親友であるのを感じた。さう思ふと彼は、自分が今日夫人と一緒に居た事情を、何だか杉浦にまで、打明けずにはゐられないやうな心持になつた。どうせ遅かれ早かれ、夫人との例の問題の交渉は、杉浦にだけは打明けねばならなかつた。そして彼の力も借り、彼の考へも聞かうと思つてゐた。そして殊に、今日自分が夫人と一緒にゐたことから、幾らか彼も事態を察したに違ひないから、隠して置いて彼を不快に思はせるやうなことがあつてはならぬやう、猶更早く打明けて、彼に對する信頼と親愛とを披瀝しよう。——小野はさう考へずにはゐられなかつた。

それで彼は折を見て、傍に居る杉浦に向つて、低い聲で云ひ出した。それでは彼を見て、傍に居る杉浦に向つて、低い聲で云ひ出した。「ねえ杉浦、實は今日僕奥さんから、例の冬子さんに就いてのお願ひの返事を聞いたんだがね。どうも餘り好望ではないんだ。」

小野は殆ど一息に、それだけの事を云つてのけた。

「ふうむ。」杉浦は、幾らか事情を察してゐたが、其處までは考へてゐなかつたやうに、意外な顔をした。そして暗鬱な皺を、眉間に刻んで此方を見返したが、暫らくして平常の聲で言つた。「併し、奥さ

んはそれに對して、承諾して居られるんだらう。」

「うむ。まあさうだがね。併し冬子さんが、さうは行かぬらしいんだ。」

小野は少し悲觀的に誇張して云つた。

「併し、それなら、心配する必要はないぢやないか。」

杉浦は鳥渡語調激しく、叱咤するやうに云つた。それはそんな問題には、自分は立入りたくないといった風だつた。それでなければ、今こんな所で、そんな問題を話し合ひたくない、といった風だつた。

「うむ。それはさうだけれど……。」

それで小野は、かう云つたきり、その場で二の句は繼げなかつた。そしてその話題が、杉浦に同情を呼ばなかつた事を、鳥渡怪しんだが深くは氣にも止めなかつた。

さうかうするところへ、夫人が席へ歸つて來た。そしてその幕は開いた。その次の幕間になつた時、少し單調なのに飽きでもしたのか、夫人は小野に向つてかう聞いた。

「この芝居はあと幾幕あるの。」

「首ひし兄」はもう後一幕きりです。が、その後翻譯物が、もう一つある筈です。」

「さう？　ぢやこの次の幕まで辛抱して、お終ひの見ないで歸つてもいゝでせう。もういゝ加減晚いから。」

「さうですね。ぢやあさうしませう。」

すると夫人は、今度は杉浦に向つて云つた。

「杉浦さん。貴方も今夜小野さんと一緒に、家へ來て泊るんでせう。」

と、突然、杉浦はすつと、立上つて、そして云ひ出した。

「いえ、僕は何だか頭が痛いから、この幕きりで失禮します。又伺ひます。」

かう云ふと共に、傍に在つた外套をかゝへて、ぶいと席から離れた。そして夫人と小野に一禮する

と、後をも見ずに出口の方へ出て行つた。

夫人も小野も鳥渡呆氣に取られてその後を見送つた。が、小野は氣がつくと、急いで出口までその後を追つて行つた。

杉浦は外套の襟を掻き合せながら、丁度出口を出ようとするところだつた。

「おい杉浦。どうしたんだ。」

小野は少し大聲で呼び止めた。

「うむ？」と、杉浦は圍の上で振り返つた。「何でもない。頭が痛いから。先に失敬する。」

かう繰り返すやうに云ひ棄て、彼は小野の止める間もないうちに、外の圍へ走り出て了つた。割に肩幅の廣い彼の姿が、表節の灯を浴びて、ちらりと浮いて見えたきり、忽ち影も形も見えなくなつた。

「どうしたんだらう。可怪しな奴だな。」

小野はかう呟きながら、暫くぼんやりとその表の圍を見送つてゐたが、臆けながら杉浦の出で行つた理由が、彼の胸を衝いて察せられた。ひよつとすると、先刻の話に關聯してかも知れない！　併しながら、それにしても杉浦に似げない、奇怪な行動だつた。

小野は考へ込みながら、夫人の居る席へ戻つて來た。

「どうしたんです、杉浦さんは。」

夫人も少し驚いてゐるらしかつた。

「矢つ張り頭が痛くて、堪へられないから歸るつて云つてゐました。」

「さうですか。でも、貴方何か氣に障るやうなことを云ひやしなくつて。」

「いゝえ、別に。只鳥渡、今日の話を簡単にしただけですが、ひよつとするとそれで、氣を悪くしたのかも知れません。」

「だつて、そんな事なら、別に氣を悪くする筈がないぢやありませんか。」

「さうです。だから妙だと思ふんです。」

「ぢや矢つ張り頭が痛かつたんでせう。」

夫人はそれほど氣にはしなかつたらしかつた。併し小野はなほも、あゝして闇の中へ出て行つた杉浦のことが、何となしに氣にかゝつてならなかつた。けれども、別に心配はしなかつた。心配したつてそれは仕方がないことだつたし、事實また、先刻から浮かぬ顔をしてゐたから、頭痛が堪へ兼ねる程強かつたかも知れぬと、強ひて思ひ直す外なかつた。

その幕が濟むと、小野は夫人と連れ立つて、勝見家へ歸つて行つた。

勝見家では、小野が幾らか恐れてゐたに係はらず、冬子嬢が起きてゐて、

「しらつしやろ。」

と、例もの通り隔意なく迎へてくれた。小野はその笑顔の中に、杉浦のことなどはもう殆ど忘れ果てなければならなかつた。……

### 三

ところが翌日、小野は宿直の當番を終つて、勝見家から下宿へ歸つて見ると、可なり慌しい亂れた文字で、墨色のかすれた一葉の葉書を自分の机の上に發見した。誰からだらうと思つて、急いで文面を讀み下して見ると、それは紛れもない杉浦の筆蹟で、かう大きな文字で走り書してあつた。

「少し頭の工合が悪くから、これから旅に出かける。雑誌の用はやつて居られない。君が宜しくやつてくれ。」

その文面を見ると、小野ははつとして立窘むやうに感じた。何だか家出の書置を見るやうな、一種の凶感に打たれたのだつた。そしてそれと同時に、やつぱりさうだつたか、といふやうな考へが、彼の胸に騒がしく起つた。矢つ張り彼は、何か苦しい事があつて、あの儘直ぐに、何處かへ出かけたのだ。矢つ張りあのことが、彼に苦痛を與へたのだ！ 小野はさう直覺した。そしてその簡単な葉書の面が、墨黒々と彼に怨恨を奔らせてゐるやうに鳥渡思つた。

何處かへ行つて、自殺する！ ふと、そんな風にも、小野には考へられた。杉浦は平常から、自殺なんぞ何でもない、何かの機會さへあれば、この生を斷つなどは容易な事だ、と云つてゐる男だつた。高等學校の時には、幾日も室に閉ぢ籠つてゐた木、一度さういふやうなことを云つて霞ヶ浦の方まで出かけて行つたが、志を果さないで歸つて來たことがあつた。だからひよつとすると、この際そんな氣にならないでもない。これは棄て、置けない。今の中に何とかなるものならどうかして行方を探して、そんなことを止めなければならぬ。——小野はすぐ、事件をそんな風に誇大に考へた。

それにしては何故、杉浦はあの時、——小野が冬子嬢に求婚しても、杉浦に取つては何でもないか

と念を押した時、さう彼は答へてくれなかつたのだらう。さう問はれて、まさか苦痛だとは、他の人との間柄ならすぐ云へぬかも知れないが、随分永い間、肝膽相照し合つた親友の間だ。さう云つてくれれば小野自身にしたつて、さう杉浦に苦痛を興へないやうな、又別な手段の取りやうもあつたかも知れない。文面が簡單で、頭腦の工合が悪いからとしか書いてないから、或ひは事實それだけの理由で、小野の思ひ過しかも知れないが、果して小野の想像が當つてゐるとすれば、杉浦の方にも責はある。——そんな風にも考へられた。

併しいづれにもせよ、この儘さうかと云つて見てはゐられない。小野は飛び立つやうにその葉書を掴んで再び戸外へ飛び出した。そして杉浦の下宿へ行つたら、まづ様子が分るだらうと、急いで五丁目の素人下宿へ訪ねて行つた。

すると其處には、果して下の茶の間に婆さんが一人きりで、ぼつんと留守を守つてゐるぎりだつた。

「あの、杉浦はどうしました。昨夜歸つて來ましたか。」

小野は少し息せき切つて尋ねた。

「杉浦さんですか。杉浦さんは昨夜十時過ぎにお歸りになりましたが、又すぐ二三日何處かへ行つて來ると云つて、その儘お出かけになりましたよ。……私は又貴方がたの方が、行く先はよく御存知だと思つてゐました。」

婆さんは早口に、こちやくとそんなことを述べ立てた。

「さうですか。僕は又杉浦が、不意に何處かへ出かけるつて葉書を寄越したんで、どうしたのかと心配して來て見たのですけれどね。ぢやア別に變つた所も見えませんでしたか。」

「さア別に變つた様子も見えませんでしたよ。何處かお友達の所へでもいらしたんぢやアありませんか。」

か。」

「部屋の中にも別に變りはありませんね。」

小野は眞面目でそんなことを訊いた。

「いえ、別に變りはありませんよ。どうしてですか。」

「そんならいゝんですけれど。」

小野はそんなことで、杉浦の下宿では、たゞ杉浦が昨夜兎に角一度歸つたことだけしか、外に知り得る所がなかつた。かう聞いたところでは、別に何も大したことはなさうだつた。が、杉浦が下宿の婆さんなどに、そんなことを知らして行く道理は、素よりないことには違ひなかつた。

で、小野の心は、それだけでは収まらなかつた。彼は下宿を出るとその足ですぐ、J新聞社にゐる池田を訪ねて聞いて見ようと思つた。杉浦が若しさういふ考へなら、同じ友人仲間の池田にも、何か云ひ置いて行つたに違ひないと思つたからだつた。そして其處で分らなくても池田に善後策を相談するのが、一番頼りになるやうに思はれたからだつた。池田は彼らよりは年長だつた。そしてさういふ世事にかけては何に依らず正しい篤實な意見を持つてゐた。——

J新聞社の受付に面會を頼んで、應接室に待つてゐると、やがてすぐ奥の暗い廊下のやうな所から、池田は近眼鏡の、奥の深い眼をしょぼ／＼瞬かせながら出て來た。

「二人は鳥渡挨拶をする、連れ立つてすぐ前のパウリスタに赴いた。

「あのね。」と、小野は其處の片隅を選び、白い大理石の卓子に、向ひ合つて腰を下ろすとすぐ言ひ出した。

「君の所へは杉浦から、何か知らせはなかつたか。」

「杉浦の所から？ 杉浦がどうかしたのか。」池田は小野の様子を、何となく慌しいのを見て取つて、すぐかう訊き返した。

「うむ。杉浦が昨夜、僕ん所へこんな速達を寄越して、何處かへ行つて了つたんだよ。」かう云つて小野は例の、郵便局か停車場で認めたらしい走り書の、黒い葉書を取り出して見せた。

「ふうむ。どれ——」池田は子供のやうな、むつちりした可愛い手をさし伸べて、それを無器用に受取つたが、一通り文面を読み終ると、又その言外の意味を取らうとするやうに、もう一度眼をその上に走らせながらかう云つた。「だが、この文面に現はれた所を見ると、別に大したことはなさうぢやないか。少し自棄になつてゐるやうだけれど。——」

「うむ。それは其文句を其儘に取れば、決して心配なことはないんだがね。實はその前後の事情が僕には何だか氣に懸つてならないんだ。」

「一體どんなことがあつたんだい。」池田は眼をしばたゝいて、沈着に反問した。

「實はね。昨日杉浦と一緒に、勝見夫人を連れてローヤル館へ行つたんだがね。その時中途から、ふいと僕等二人を残したまゝ、席を立つて出て行つたきり、その足で何處かへ行つちまつたらしいんだ。尤も一應下宿へは寄つたらしいがね。」

「ふうむ。どうしてそんなことをしたんだらう。」

「それがね。頭が痛いから歸つて、急に云ひ出したんだけれどね。後から僕が追ひかけて行つて、出口で呼び止めた時の顔の表情では、どうもそれだけぢやないらしいんだ。何だか厭に苦痛らしい顔で、僕を振り返つて見たんだが、僕は何だか厭な氣がした位だつたよ。それで僕はどうもそれには別な理由があると思つたんだ。」

「別な理由つて？」

「實はね。」と小野は告白するやうに、下を向いて言ひ始めた。「君も薄々は知つてゐるだらうが、僕はあの勝見家の、一番目のお嬢さんに前から好意を感じてゐたものだからね。最近思ひ切つて奥さんに、求婚を申込んだんだよ。そしてその内諾みたいなものだけは、奥さんから得たんだがね。併しまだ話は、當人ももう少し考へさせてくれといふので、具體的には少しも纏まらないけれど、昨日その話の概略を、杉浦にふと僕がして聞かせたんだよ。そしたら杉浦は、不快さうにそれを聞いてゐたが、その次の幕間になつて、急に頭が痛いからつて、飛び出して了つたんだらう。僕としては何だか、その問題が原因のやうに、考へられてならないんだよ。」

かう云つて小野は、池田の奥深い眼を、窺ふやうに見やつた。

「ふうむ。——ぢやあ君は杉浦も、そのお嬢さんに戀してゐて、苦痛を感じたと云ふんだね。」

「まアさうだ。だからその前に、僕は自分の心持を、すつかり杉浦に打聞けて、冬子さんに求婚するが、君に苦痛を與へないか、つて念を押さへしたんだがね。その時は杉浦も、別に何とも思つてゐないつて、言下に言ひ切つたものだから、僕はすつかり安心して響る杉浦に喜んで貰へると思つて、ことを其處迄運んだんだがね。今になつてそんなことをする位なら、あの時に正直に云つてくれれば、僕だつて考へやうもあつたんだけれど。……」小野は少し恨むやうに言つた。

「ふうむ。さうかい。そんなこともあつたのかい。併し、さう聞かれて、杉浦の隠忍な性質としては、すぐ苦痛だとは云ひ切れないよ。それに、君がさう云つた時は、大した感じもしなかつたのかも知れないが、併しさうして君が夫人の内諾を得たり、色々ことが具體的になりかゝつて見ると、急に苦痛を自覺して來たのかも知れないからな。」



池田は池田らしい批判を下した。

「それや大きにさうだ。が、さうだつたとすれば、僕は何か愈々氣になるんだ。いづれにしても若し萬一のことが杉浦にあつたりすると、僕たちは一生暗い影を背負はなくなりやならないからね。——どうしたらいいだらう。」小野は、感傷的にならざるを得なかつた。が、池田は沈着に動かないで云つた。

「どうするつて、仕方がないぢやないか。その儘にして置いて、成行を見るほか。——第一杉浦が果してさう思つて自殺しに行つたのかどうか、それとはつきり分らないぢやないか。又さうにしたところが、どうにもできないぢやないか。たとひ君と杉浦とが、同じお嬢さんに戀して、そのため一方が苦痛を感じたつて、それは仕方がないことだよ。一方が苦痛を感じたからつて、それをやめる譯には行かないしね。」

「併し理解ある友人同志の間で、さういふ苦痛を感じさせないやうにはできるぢやないか。」

「それやアさうだ。が、併し君の今の場合のやうに、無意識に自然苦痛を與へたつて、それは仕方がないことだよ。是が若し君に惡意があつて、競争者の杉浦を出し抜いたとか、何か陥れたやうなことでもするとか、また奪つたとかいふのなら、君に道德上の責任もあるがね。さうでなくて君の場合、いつもの開けつ放しの人の好きで、君に對手を此つてさへゐるんぢやないか。その上で、さういふことになつたつて、君は何もさう心配する必要はないよ。」

「それでも感じだけは悪いからな。」

「大丈夫だよ。第一杉浦がそんな氣で飛び出したにしろ、自殺なんぞする氣遣ひはないよ。それやア彼奴は昔から、自殺する／＼つて、陰鬱な顔をしてゐる男だつたが、さう容易に自殺なんぞ

できるもんぢやないよ。その中にきつと見てゐ給へ。いつかの霞ヶ浦行きたいに、頭が直つて歸つて來るから。」池田は直截に明快にさう論斷した。

「さうだといゝがねえ。」

小野は併しまだそんな風にうじ／＼考へ込んでゐた。

「とは云つても、此處で杉浦に死なれたら、君は一生呪はれたやう厭な氣持がするだらうな。」池田は自分の説を、すつかり吐き盡してふと、冗談らしくそんなことを附け加へて云つた。

「それやアさうだな。併し又杉浦が冬子さんを思つてゐるなら、いつそ今死んで了つてくれたら、とさう庶ふやうな氣もないではないよ。」

小野もそんな風に云はれると、かう冗談らしく云つた。が、それは或程度まで、彼の内心の聲だつた。

「それやア矢つ張り、杉浦の存在が邪魔になるだらうね。戀をする人に取つては、どんな無力の競争者だらうと、氣に懸るものらしいからな。」

「殊に杉浦などは苦手だからな。」

かう云つて小野は再び冗談に微笑した。

「併し、」池田は又本論に歸つた。「杉浦が悲觀してゐるとすれば、可哀さうだな。それに就いて僕に一つ慰める方法があるんだけれど、……さうと知つたら、早く云つとけばよかつた。」

「何だい。どんなことだい。」

「實はあの川瀬の家でね。杉浦に家庭教師旁々、來て貰ひたいと云つてゐるんだがね。そんなことがあつたら、幾らか紛れたかも知れない。歸つたらすぐ話してやらう。」

川瀬家といふのは、麻布の廣尾にある富豪で其今亞米利加へ行つてゐる子息とは、小野たちも高等學校時分から友人で、池田などは學費の補助を受けてゐた家だつた。そして池田は今でも、その家に寄寓してゐるのだつた。

「さうか、それやアいゝね。併し、君はどうするんだい。」  
小野は鳥渡不審に思つて訊いた。

「僕か。僕は今迄誰にも言はなかつたが、今度結婚するよ。それは君のとは違つて、すつかり定めて了つたんだ。來月頃、故郷へ歸つて式を擧げることになるだらう。」

「へゝえ、さうかい。」小野は落着いて、まじく廣い顔を微笑せてゐる池田を、今更驚いて見守らなければならなかつた。「君がかい、へゝえ。」

「どうだ、驚いたらう。僕も改宗したんだよ。相手は國の方の、極あたりまへの人だ。」

「さうかねえ。すると杉浦のことでもなけれやア、世はおしなべて春なんだね。」

小野はそんな風に、わざと咏嘆的に、感慨を洩らさずにはゐられなかつた。平常から、自分を飽くまでも醜い男と一途に思ひ、誰も相手にしてくれないとのみ信じて、遂に女性に興味を持たなかつたばかりか、結婚生活などには初めから何物をも求めないで、結婚するとすれば、不具か何かで金がある人と、犠牲的にまた物質的に結婚してもいゝとまで、よく云つてゐた變り者の池田が、さういふことになつたとは、この際がこの際でなかつたなら、躍り上つて嬉しがるところだつた。

「なアに俺のなんぞは、君のやうなのとは違ふ。君もさういふことになつたんなら、何より幸福ぢやないか。まア精々成就するやうに努力しろよ。杉浦のことは心配するに及ばない。きつと何でもないから。……」

池田にさう云はれると、何でもないうやうであつたが、やつぱり小野には、池田に別れて一人になつてからも、あの時暗へ出て行つた杉浦の、後姿がちらつて、氣になつてならなかつた。

杉浦は果して何處へ何しに行つたのだらう。

## 第十 章

池田にさう云はれたにも係らず、杉浦の行方に就いて、小野は猶まだ心配を去る譯にはいかなかつた。彼はその足ですぐ勝見家を訪ね、磬子夫人に面會して、事情を訴へた方がいゝと考へた。

併し、彼は心の奥で鳥渡躊躇した。若し杉浦が、ほんたうに冬子嬢に戀してゐて、そのために家出をしたのだとすれば、その事態を正直に勝見家に知らせることは、杉浦に對する同情を増させるかも知れない。そしてそのために、當人の冬子嬢を初め、磬子夫人の小野に對する心も、幾らか動搖するに違ひない。少くとも當分は、小野の求婚に應ずることを、逡巡しないとも限らない。それは小野

にとつて、可なり苦痛なことである。だから、池田もあゝして大丈夫だと云ふのはあるし、この際杉浦の行方に關しての心配などは、小野一人の胸の中に藏つて置いて、勝見家の人たちなどには、そんなことは聞かせないがよい。そんな餘計な取越苦勞なんぞをするには及ばない。……

が併し、また小野は考へ直した。果して杉浦が自分と冬子嬢との問題のために、苦痛を感じて家出したとすれば、——小野は心の底で、飽くまでさう信ぜずにはゐられなかつた。——その當事者であ